

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 48 回 第 11.1.8 節～第 11.1.9 節

2019 年 12 月 15 日

小 田 勝

「11.1.8 転成名詞」の続きから。316 頁用例(4)は、表示を以下のように変更して、第 11.1.9 節に移動する。

- ・ 世の中を憚りて位を譲り聞こえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。 (源・藤裏葉)

用例(5)は、第 11.1.9 節の用例(5)と重複しているので、本節の方を削除する。

317 頁の用例(6)～(10)の部分は、動作性名詞に関するものなので、第 11.1.7 節に移動する。類例をあげておく。

- ・ 清盛だにあらば、かくはよも出ださじ。この人々の熊野に参詣こそ、重憲が不運なれ。(平治)
- ・ 平将門を追討の賞にて、藤原秀郷正四位下に叙し (神皇正統記)

同頁用例(13)～(15)の類例、

- ・ 天下の許されを得んことあるべからず。(風姿花伝)

用例(17)の類例を追加する (これについては、第 10.1.5 節も参照)。

- ・ 支度のごとくにて焼亡の間、さりげなしにて (=何モナカッタ様子デ) [車ヲ門外ニ] やり出だしてけり。(愚管抄)
- ・ 見れば、手ごとに火をともして、百人ばかりこの堂の内に来集ひたり。近くて見れば、目一つつきたりなどさまざまなり。人にもあらず、あさましき者どもなりけり。(宇治 1-17) <修行者、百鬼夜行にあふ事>

同頁◆については、ほかに「祓へ／祓ひ」、「互ひに／互へに (文机談)」などの例があり、ハ行動詞以外でも、「月よみ／月よめ (千載 989) (ともに「月」の意)、「手だり／手だれ」、「みだり／みだれ (-足・-心地)」のようなゆれがある。

現代語の「向こう側」などの「向こう」の歴史的仮名遣いは、これを動詞「向かふ」の終止連体形からの名詞化と考えるなら「むかふ」、連用形転成名詞「向かひ」のウ音便形と考えるなら「むかう」となるのだが、どちらか決しにくい。

用例(1)～(12)のような例をあげたが、動詞の転成名詞が常に動作的な意味を保持するとは限らない。例えば次例は、「(朝の) 涼しいうちに」のような意である。

- ・まだ朝涼みのほどに渡り給はむとて (源・若菜下)

317 頁「11.1.9 句の名詞への圧縮」の用例を追加する。

- ・染め木が汁に染衣しめころもを (記歌謡 4)
- ・上野伊香保の沼に植ゑこ小水葱なかく恋ひむとや種求めけむ (万 3415)
- ・争ふな野辺かはもりの川守網代木を打ち変へ方がたに (=網代木ヲ打ち変エタ方ニ) 氷魚ひをも寄りなむ (大齋院前の御集)
- ・なかなかとぶひに飛火の杜もりのほととぎす君恋ひなきはよはにこそ鳴け (元良親王集)
- ・あなわびしと思ひて、「今一度起こせかし」と思ひ寝ねに聞けば (宇治 1-12)
- ・君をのみ思ひ寝ねに寝し夢なれば (古今 608)

本書の範囲外だが、このような句型は、後世の資料にも引き続き存する。

- ・多年の主人の過分の財宝を取りくせごとごとは曲事くせごとぢや。(天草版イソホ)

次例の下線部は、主語・述語であるべきものが、名詞に圧縮されている。

- ・こりつめて真木の炭焼くけをぬるみ (=空気が暖カイノデ) 大原山の雪のむら消え (後拾遺 414)
- ・下萌ゆる春日の野辺の草の上につれなしとても雪のむら消え (後鳥羽院御集)

2018年1月1日に、本書第2章のところから開始したこの補遺稿は、2年で114頁に達した。比較のために書いておくと、本書の本文(第1章～第21章の部分)は、この補遺稿と同じ書式に落とすと694頁の分量である。

2週間ごとの更新というのは想像以上にせわしないもので、特に本年4月に勤務先で部長職を命じられてからは、時間の無さが身にしみることになった。もっとゆっくと進めたい気もするし、今までの分の補いのメモもだいぶ溜まってきているけれども、とりあえず来年も、このペースで、このまま先に進もうと思う。どなた様も良いお年をお迎えください。